

國學院大學學術情報リポジトリ

五 地域復興と神社祭礼の多面的考察：
宮城県仙台湾沿岸地域の神社祭礼に関する新聞情報
を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 滝澤, 克彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001083

五 地域復興と神社祭礼の多面的考察

―宮城県仙台台湾沿岸地域の神社祭礼に関する新聞情報を通して―

滝澤 克彦

岩沼市の事例を出発点として

筆者は、東日本大震災後の地域社会と民俗文化の問題について、宮城県岩沼市で継続的な調査を行ってきた。この地域の一つの特徴は、地域のいわゆる「伝統文化」「民俗文化」のようなものが、そこまで復興において中心的な役割を果たしてこなかったこと、そしてそれゆえに調査や報道において、それら「文化」が取り上げられることの少なかったことである。一方で、岩沼市は、集団移転の決断や実行が市町村単位でもっとも早くスムーズに行われたこともあり、復興の「トップランナー」と呼ばれてきた。特に、重要なのは、それが単なるスピードだけではなく、避難から仮設住宅への入居、集団移転にいたるまで、もともとあった集落のまとまりをできるだけ維持する形で進められてきたこと、さらに、新しい居住地の設計が住民の主体的関わりによって進められてきたことなどから、コミュニティ維持という観点からも肯定的な評価を受けてきたことである。一般に、社会科学的研究において地域の復興と民俗文化は、正の相関関係において語られることが多いので、この事例はその興味深い反例となっている。

なぜ、岩沼市においては、地域の伝統行事や民俗文化が復興において中心的な役割を果たしてこなかったのか。そして、人々はそのことを含めて、復興過程における地域の文化をどのように認識してきたのだろうか。

岩沼市では、震災後、神事のみの記事を除けば、もともとあった祭礼は六つの地域のすべての神社において復活していない（震災前から行われなくなっていたものも含め）。一部では神職と住民の軋轢が表面化する問題などもあったが、一方で現地再建した住民と移転した住民でのあいだの意識の違いが関係する場合もあった。特に、現地再建する住民がいた場合、移転する住民はもとの神社の祭礼については残る住民に委譲する考えが強く、積極的な関与を控える傾向がある。そのため、残されたわずかな住民（震災前の十分の一に満たない）にとって神社維持が負担となる一方、移転した住民は新たな場所での「前向き」にコミュニティを創造していくことが可能となっている。

ただし、集団移転先におけるコミュニティも単純ではない。地域ごとのまとまりがあるとはいえ、もともと六つだった地域が一カ所に集められて成立しているため、他の地域への配慮もあって、移住前の地域性を前面に出しすぎるといふことには慎重な姿勢が見られる。たとえば、元の地域の神社祭礼については玉浦西地区という場所で行うことはできない。特に「宗教の問題」には慎重になるべきであるという。

新たな移転先の「玉浦西地区」を象徴するものは、「創造された伝統」としての盆踊りや神社との関わりをもたない新しい子供神輿、小学校の学区単位で近隣の子供と合わせて行われる「ソーラン節」などである。これらの新たな文化は、彼ら独自のバランス感覚にもとづき、地域外の人々の協力や助言を仰ぎつつも、主体的に生み出されてきたものであると言えるだろう。

このような岩沼の事例は、先述したような伝統文化と地域復興の正の相関関係が強調される文脈、特に報道の文脈からは抜け落ちており、実際に、岩沼市被災地域の神社や祭礼に関する情報は驚くほど少ない。一方で、この事例をどのようにとらえるべきか、特にその特殊性と普遍性については、他の地域との慎重な比較の上に論じられなければならないだろう。その際には、地域ごとの元の人口規模や産業構造、契約講・町内会などの地域組織形態、被災状況、

移転のあり方などが考察されなければならぬだろう。そして、被災後の経過のなかで、地域がどのように外部の人々や機関と関わってきたかについても吟味する必要がある。さらに、報道や学術調査を含めたメディアが、その状況などのようにとらえ、発信してきたかも重要な要因となるはずである。

以下では、宮城県仙台湾沿岸地域（東松島市・山元町）の神社祭祀に関する報道について河北新報データベースをもとに整理し、それによって、岩沼市の事例がより広い被災地との比較においてどのような特殊性と普遍性をもつかを考察したい。

宮城県仙台湾沿岸被災地域の神社に関する新聞報道について

東松島市から山元町に至るまでの宮城県仙台湾沿岸地域において、被災した神社がどれほどあるかを漏れなく確認することは非常に難しい。特に、震災によって流失してしまった神社などの場合には、現地調査でかつての存在自体を採り当てることさえ困難である。ここでは、地図や各種のデータベースを用いながら、神社自体あるいは、その属する地区が浸水した神社をリストアップした。ただし、浸水域に該当する場合であっても、その神社や地区が地震・津波による影響をほとんど受けていないことが明らかとなっている場合には除外してある。その結果、抜けはあると思われるが、少なくとも該当する九七の神社の存在が確認できた。

今回の調査では、河北新報のデータベースを用い、そこに収録された『河北新報』、『石巻かほく』、『河北こども新聞』のいずれかに記載された、九七社についての記事を収集した（表1）。九七の神社のうち、データベースに何らかの記事が見いだされたのは三三社である。大半の神社が、新聞に一度も取り上げられていないことが分かる。さらに、三三社のうち記載一回が八社、二回が七社、三回が四社であり、四回以上とりあげられている神社になると一四社に

しはられてくる。一四社のなかでも、山元町笠野の八重垣神社（二三）、塩竈市の御釜神社（二一）、亶理町荒浜の川口神社（一九）、名取市閑上の湊神社（二六）の四社が突出しており、他は多くとも七回以下である。以上のことから、神社の現況に対する新聞報道の関心に大きな格差があることが分かる。

問題は、このような関心の格差が、神社祭祀や地域社会の状況とどのような相関関係、影響関係にあるかであろう。例えば、岩沼市の六地域に関しては、仮社殿の再建など少しずつ動きがあるものの、祭祀が再開していないこともあり扱いは小さい。それに対して、先述した四社については、いずれも二〇一一年あるいは二〇一二年という比較的早い時期に例祭や恒例行事を再開しており、それが毎年報じられるなかで、社殿や鳥居、神輿、祭具などが段階的に再建、修復、寄贈されてきている。

一方で、四社をとりまく地域社会のあり方はさまざまである。山元町笠野の八重垣神社は、神社の氏子であった約二五〇世帯のほとんどが津波により家を流され、地域の大部分が災害危険区域に指定された上に、地域の集団移転もかなわなかったために、神社を取り巻く社会の状況は大きく変化している。神社祭祀は、離ればなれになった氏子たちが一同に会する重要な機会となっている。

川口神社の所在する亶理町荒浜は、震災前には約一三五〇世帯が暮らす比較的大きな地域であった。そのうち四〇〇世帯ほどが被災したが、残りの世帯は現地再建を果たしている。また、漁港や市場の再開もあり、神社をとりまく地域環境は、八重垣神社ほどの激変を経験したわけではない。それでも、震災直後から再開された神社祭祀が、現地再建を果たした人のみならず、地域を離れざるを得なくなった人々をも結びつける大きな役割を果たしている。

名取市閑上では、日和山が慰霊の場所として現在まで多くの訪問者を迎えているが、鎮守である湊神社は、社殿等がすべて流失してしまっていた。しかし、二〇一一年六月に日和山に祭神を分霊し、秋にはそこで例祭を再開してい

る。翌二〇一二年の例祭では、同じく日和山にて、寄贈された神輿の渡御が行われた。地区の大半は災害危険区域に指定されてしまったが、神社そのものは移転先にて再建される予定である。

以上の三社は、神社の被災状況、移転の有無、地域集落の現地再建および移転の状況、地域社会の離散状況などに違いがあるものの、震災後の早い段階で例祭を再開している点が共通している。一方で、市街地に位置し、鹽竈神社の末社である御釜神社については、三社と同列に論じることは難しい。しかし、恒例の藻塩焼神事はメディアに対する露出の契機となっている。このように再開後も毎年実施される例祭と段階的に行われていく再建や修復などが、突出した新聞報道の要因になっている。このような神社祭礼の展開には、ボランティアや寄贈・寄付など、地域外の人々、機関の関わりが不可欠である。そこにメディア報道と復興の好循環が生じていることは確かであろう。

四社について多い七回の掲載が、東松島市大曲浜の玉造神社、同市宮戸月浜の五十鈴神社、仙台市宮城野区蒲生の高砂神社、山元町花釜の青果稲荷神社である。青果稲荷神社以外は、いずれも、神社に付随する民俗芸能や行事が報道の主題となっている。青果稲荷神社は、災害ボランティアとして神社に関わっていた男性が、それをきっかけに神職となったことから新聞に取り上げられるようになり、その後神社の復興に関する記事も増加した。一方で、玉造神社については、市指定無形民俗文化財である大曲浜獅子舞が主に復興のシンボルとして報じられた。また、五十鈴神社は、震災前から紙面の風物詩のように毎年取り上げられてきた小正月行事の「えんずのわり」が、震災後はそこに「復興」の意味あいが付け加わりつつ継続的に報じられている。高砂神社については、その神社の由来である兵庫県高砂市の高砂神社との関連で紹介されることがあったが、震災後はその縁により全壊した社殿の再建に兵庫の高砂神社の寄進があったことなどが取り上げられている。さらに、震災前から行われていた一八八一年に殉職した警官の慰霊祭が、震災後再開したことともなう定期的な報道がある。

このように震災前からも認知度の高かった恒例行事が、震災後にも引き続き報道され、人々の強い関心を集めている神社も多い。例えば、三陸沿岸地方の場合には、石巻市大須の八幡神社例祭における神輿の海中渡御や同市大浜の葉山神社の雄勝法印神楽などが該当し、いずれも紙面の風物詩となっている。しかし、これらの行事の継続性がかならずしも神社そのものの再建やそれを取り巻く地域の復興とまったく歩調を合わせているとは限らないことには注意しておく必要があるだろう。

報道の二極化傾向と報道されない神社の動向

報道に上らない神社の動向はどうなっているだろうか。まったく報道されない神社の状況を確認するためには、一つ一つ歩いて情報を集めるしかないが、そのような神社にはそもそもまったく動きがないことも少なくない。場合によっては、以前の存在自体を確認することさえ難しくなっている場合もある。

例えば、山元町牛橋の薬師神社は、新聞でも取り上げられておらず、神社本庁所属のものでないことから、ほとんど情報がない。かろうじて、先述した青葉稲荷神社禰宜となった男性のブログに、支援が受けられずに基礎の跡だけが残っていることなど、報告があるだけである。^①震災前には薬師神社前というバス停もあったので、人々の暮らしの中では決して小さな存在ではなかったはずである。しかし、現状を含めて記録が残されないならば、仮に神社の再建が果たされなかった場合、この神社が存在したという事実さえも消えてしまいかねないだろう。

先に取り上げたような紙面の常連となっている神社と、そうではない神社の対比は、報道における関心の二極化を表している。そして、その二極化は神社祭礼の復活をめぐる二極化傾向と相関性があるのではないかという推測も抱かせる。例えば、最初に取り上げた岩沼市の場合にも、社殿自体の再建は果たしているものの、かつての神社祭礼が

復興する見通しはほとんどないことが、神社についての報道の少なさに反映されているのは確かであろう。

しかし、網羅的に見た場合、その相関性は果たしてどうなっているのだろうか。著者を含めた共同研究プロジェクトが震災直後の三年ほどに行った調査によると、その期間の動きを見ただけでも、そのような相関性が成り立たない場合があることは分かっている。祭礼を再開した神社にとって、報道がどのような影響を与えるのかということと同様に、祭礼を再開した神社にとって、報道されないことがどのような意味をもつのかということも問われねばならないだろう。

一般的に、神社祭礼の復活は「地域復興のシンボル」という位置づけで報じられることが多い。当然、そのようなニュアンスが、現地の人々が抱く希望を表現している場合があることは確かである。しかし、事実として神社祭礼の復活が地域復興そのものに結びついていないことは多い。そうであるならば「復興のシンボル」という理想が、住民の原動力となることもあれば重荷になることもある。例えば岩沼市の場合、先述したように神社の祭礼については残る住民に委譲する考えが強いが、ある新聞では、そのような移転住民の消極的関わりが「突き放した態度」と表現されてしまった。また、岩沼市とNHKが大々的に関与して行われた二〇一五年七月の「玉浦西地区まち開き感謝祭」では、地域とは関係のない神職が祈禱した神輿の渡御が行われたが、このことについてあまりよい捉え方をしない人もいる。これは極端な例かも知れないが、このような問題に注目することは、地域の維持と復興において、当事者である住民が外部の人間や機関と接触する際、その関わりをどのように主体的に調整しようとしているかを読み解く上で重要なことである。当然、その外部には、メディアはもちろん研究者自身も含まれていることを自覚しておかなければならない。

おわりに

メディアが震災と祭礼復興の関係をどのように記述するか、そして、そのこと自体が再帰的に地域にどのような影響を及ぼすかは、非常に意義深いテーマである。なぜなら、その研究は、まさに震災の記憶が歴史に痕跡を残していくときのダイナミズムを記録することになるからである。当然、報道は地域と外部との関わりの一部に過ぎない。とはいえ、その関わり方は、研究者自身の対象に対する関わりとも関連している部分があり、研究を相対化する上でも示唆的なものとなるだろう。

本稿では、そのための予備的な作業として、宮城県仙台台湾沿岸被災地域の神社祭礼に関する新聞記事を調査した。悉皆調査という意味では、地域的には宮城県に限っても三陸沿岸地域へと広げて考察する必要がある、またデータについても河北新報以外の報道へ対象を広げる必要がある。さらに、各分野の研究における対象の選定に見られる傾向を踏まえた上で、報道と研究の空白地域へ足を伸ばし現地調査を行う必要も出てくるだろう。それによってこそ、神社祭礼の復興と地域社会の関係全体の中でメディアや研究がもつ意義が明らかになるはずである。

小括としては、岩沼市の事例に鑑みて、神社祭礼と地域復興の関係については報道や研究でほとんど触れられていない地域に、まだまだ取り上げられるべき対象があることを指摘しておくにとどめたい。そこには、岩沼市特有の事情が関連しているとしても、その事情の普遍性と特殊性を判断するためには、さらなる現地調査と悉皆的な分析が求められる。

註

- (1) <https://blog.canpaninfo/shinkou/archive/36>、最終閲覧日二〇二〇年一〇月一四日

掲載記事数	神社数	神社名
23	1	八重垣神社（山元町）●
21	1	御釜神社（塩竈市）○
19	1	川口神社（亶理町）●
16	1	湊神社（名取市）●
7	4	玉造神社（東松島市）○、五十鈴神社（東松島市宮戸）○、高砂神社（仙台市）○、青巢稻荷神社（山元町）●
6	3	海津見神社（東松島市）●、八幡神社（多賀城市）、富主姫神社（名取市）
5	1	萩原神社（多賀城市）○
4	2	神明社（岩沼市長谷釜）、鳥海鹽神社（亶理町）●
3	4	五十鈴神社（東松島市大曲浜）、白鬚神社（東松島市）、五柱神社（仙台市）、下増田神社（名取市）
2	7	熊野神社（東松島市牛網）○、鹿嶋神社（東松島市宮戸）、大塚五十鈴神社（東松島市）○、籬神社（塩竈市）●、鼻節神社（七ヶ浜町）●、大和神社（仙台市蒲生）、川口神社（仙台市蒲生）
1	8	愛宕神社（東松島市牛網）、五十鈴神社（東松島市浅井）、諏訪神社（七ヶ浜町）●、汀沈稻荷神社（仙台市）、二ノ倉神明社（岩沼市）、神明社（岩沼市蒲崎）、湊神社（岩沼市）、天神社（山元町）
0	64	略
計	97	

表1 河北新報データベース（河北新報、石巻かほく、河北子ども新聞の記事を収録）において当該神社に関する情報が掲載された記事数

●…祭礼再開（あるいは継続）

○…神社に関わる恒例行事再開（あるいは継続）